ドイツにおけるモード誌の文体的特徴をめぐって

—1786年と1814年の服装記事を例として—

芹澤　円

1.　はじめに

15世紀中葉にヨハネス・グーテンベルクが活版印刷術を発明して以来、ドイツにおいてさまざまな印刷物が発行されてきた。16世紀の宗教改革時代には、カトリック陣営とプロテスタント陣営が、挿し絵が付された印刷ビラや、テクストのみで構成される小冊子を多く流布させた。これらは、自己の主張を正当化し、庶民を啓蒙し、そして読者や聴衆を煽動・説得しようとした「民衆教化文書」(新田 2010: 78) であった。[1] この時代の印刷物には、宗教改革に関わるもの以外に、「政治的な報告や、不可思議な現象を報告するもの、風刺、教訓的もしくは娯楽的なテクスト」(Silling 1990: 105) なども存在した。17世紀初めになると、ドイツで週刊新聞が印刷され始める。6件から8件の通信記事から構成されていたこの週刊新聞は、ヨーロッパ各地の時事報告を伝えるものであった。Demske-Neumann (1996) や Straßner (1997) などの先行研究では、週刊新聞のテクストの言語的特徴として、受動態の頻繁な使用、複合的な名詞句の使用、そして「数珠つなぎ複合文 (abperlendes Satzgefüge)」[2] の使用が挙げられている。これらの週刊新聞

1) 筆者は、芹澤(2011)において、宗教改革時代の印刷ビラを例にして、読者・聞き手への訴えかけを強めるために用いられたレトリックについて分析を行った。また芹澤(2012)においては、宗教改革時代において印刷ビラのテクストに小冊子よりも高い話しことば性が認められることを論じた。これは主に、小冊子が知識階層向けに作成されたのに対し、印刷ビラが文字の読めない一般庶民に向けて作成されたものであり、当時、文字の読める人が読めない人に向けて読み聞かせを行っていたことと関連していると考えられる。耳で聞くテクストを意識したことによって、より話しことば的なテクストが作成されたと推し量ることができる。

2) 週刊新聞における数珠つなぎ複合文は、「報告される出来事の中心部分を含む主文のあとに、二つ以上の従属文 […] が続いている」(Polenz 1994: 371)。繋がるそれぞれの文が、まるで数珠をつなげたように連なるため、このような名称となっている。例えば芹澤 (印刷中) にてサンプル調査を行ったところ、17世紀の週刊新聞における一記事には„Alhie stehen alle sachen Gott lob wol (主文) / dann auff 12. diß […] eine ver-

の言語的・文体的特徴は、報道内容を客観的かつ正確に報告するという新聞の機能ないし使命と関わっていると考えることができる。[3)]

このあと、ドイツでは「17 世紀後半から『新聞』の発行が本格化」（赤木 2008: 1）すると同時に、「『雑誌』という形式が成立し […]1740 年代以降急速に発展」（同上、同頁）したという。そして 18 世紀後半になると、モード誌（Modejournal）が登場し始める。宗教的教化や時事報告を行っていた印刷物が、今や贅沢や流行をひとに伝えるためのメディアにもなったわけである。1786 年に刊行が開始され 1827 年まで発行された『豪奢とモードのジャーナル』（„Journal des Luxus und der Moden"）は、最初の重要なモード雑誌とされる（Kröll 1979: 162 を参照）。このモード誌は、フランス、イギリス、オランダなどドイツ語圏以外のヨーロッパ諸国でも読まれていた。『豪奢とモードのジャーナル』は、「最盛期には一つの版が 2250 冊に達し […] 少なくとも 2 万 5 千人の読者」（Kuhles 2000: 489）がいたと見積もられており、現在のベストセラーに値すると言われている（Kuhles 2000: 489 及び、Kröll 1979: 162 を参照）。では、このモード誌は、どのような言語表現によってモードという豪奢を読者に伝えたのであろうか。どのような文体的特徴を有したのであろうか。これが本論文のテーマである。

2.　『豪奢とモードのジャーナル』について

2.1.　「モード」の範囲

ドイツ語の「Mode ということばは、フランス語の à la mode から派生」（Kuhles 2000: 493）している。1800 年前後のドイツにおいてモード（Mode）はどのように捉えられていたのだろうか。同時代に書かれたアーデルングとカンペのドイツ語辞典における Mode の定義は、次のとおりである。

> 社交生活において取り入れられた振る舞い方のことで、習慣、慣習を意味する。狭義においては、〔時と共に〕[4)] 変わる衣服のまとい方や装身具の類い全般の付け方を指す。かつては、Weise という語も使用された。（Adelung 1798: Bd.3, 254）

gleichung geschehen （従属文）/ welche *Tactaion* […] gewehrt.（従属文）"のような数珠つなぎ複合文がみられた。

3) 17 世紀初めの新聞の言語的特徴に関しては、筆者は芹澤（印刷中）で論じている。

4) 〔〕内の記述は筆者による補足である。以下同様。

社交生活において取り入れられた、好ましく美しいと一般にみなされる振る舞い方のこと。特に、ひろく受けいれられてはいるが〔時と共に〕変わる衣服のまとい方や装身具の付け方のこと。(Campe 1809: Bd.3, 327)

したがって、1800 年前後のドイツにおいては、Mode は、狭義では衣服と装身具を指したが、広義では社交生活において一般に好ましいされる振る舞い方全般を指したことがわかる。この広義の Mode の意味に対応して、『豪奢とモードのジャーナル』は、流行の衣服・装飾品だけでなく、家具や演劇、庭園芸術、旅行、健康、経済など多岐にわたるテーマを扱った（Kuhles 2000: 495 を参照)。当時、雑誌全般の読者としては、読書能力があり、読書に費やせる時間を多く持った「教養のある上流階層」が想定されていた（赤木 2008: 3 を参照)。このことは、『豪奢とモードのジャーナル』についても当てはまると言えると考えられる。

2.2. タイトル変更と編者交代

『豪奢とモードのジャーナル』は、1786 年から 1827 年の間、月刊誌として 42 年間刊行され、1 年次当たり平均して 700 頁の大きさであった（Kuhles 2000: 494 を参照)。外形としては八つ折り判（Oktav）で発行され、これは当時の雑誌として一般的な大きさであった（赤木 2008: 2 を参照)。[5] 値段は「1 年次ごとに 4 ターレル、のちに 8 ターレル」(Kuhles 2000: 492) ほどであった。

このモード誌は、タイトルの変更が何度か行われている。1786 年に『モードのジャーナル』(„Journal der Moden“) として創刊された雑誌は、翌年 1787 年に『豪奢とモードのジャーナル』(„Journal des Luxus und der Moden“) というタイトルに変更され、このタイトルを保持しながら 1812 年まで発行される。この 26 年間が同一のタイトルが使用された最も長い記録となった。1813 年には『豪奢とモードと芸術物のためのジャーナル』(„Journal für Luxus, Mode und Gegenstände der Kunst“) というタイトルに変えられたが、これは 1813 年のみの使用に終わった。1814 年から 1826 年までは『文学、芸術、豪奢、モードのためのジャーナル』(„Journal für Literatur, Kunst, Luxus und Mode“) として刊行された。そして最後の年である

5) 最後の 1827 年の第 42 巻のみ、大判で発行された。

1827年には『文学、芸術、社交生活のためのジャーナル』(„Journal für Literatur, Kunst und geselliges Leben")というタイトルでその42年続く雑誌を締めくくった。このようなタイトルの変遷は、当時の変化する社会や文化に柔軟に対応しようとする姿勢の表れとも見て取れるだろう。

このモード誌は、1786年にFriedrich Justin Bertuch (1747-1822) とGeorg Melchior Kraus (1737-1806) によって創刊された。二人は創刊時から編者を務めていた。Krausはとりわけ雑誌の挿し絵を担当し、当初の銅版画の作成を一手に担っていた。1786年から1806年にかけては、創刊者であるBertuchが編者を務めた。その後、Bertuchはその役を息子であるCarl Bertuchに任せ、息子が没する1815年まで務めさせた。このあと編者がめまぐるしく変わっていくことになり[6]、1815年以降はこの雑誌は「モードと豪奢という内容との関連性は徐々に緩くなり、[...]娯楽雑誌となって」(Kuhles 2000: 494) いった。

3.　近いことば性（話しことば性）から見た分析

3.1.　分析対象とする記事

本論文は、『豪奢とモードのジャーナル』がモード誌としてどのような文体的特徴を有していたのかについて考察を行おうとするものであるが、モード誌としての文体的特徴というものが初めから存在したのではなく、しだいに形成されていった可能性があると考えられる。そこで、本論文では、刊行初年の1786年の記事と、上述のように「モードと豪奢」をまだ明確にトピックとしていた最後の年である1815年の記事とを比較することによって、モード誌としての『豪奢とモードのジャーナル』の文体的特徴についてパイロット調査を行う。分析の対象とするのは、

テクストA：1786年の1月号17-21ページ、「女性の服装(Weibliche Kleidung)」
テクストB：1814年の1月号、55-61ページ、「モード、1813年12月、ベルリンからのモード報告（Moden. Modebericht aus Berlin, im De-

6) 1815年だけHeinrich Döringが編者となり、1816年から1822年までの間は、Bertuchの娘婿であるLudwig Friedrich von Froriepが編者となった。1823年にはEdmund Ostが編者となったが長くは続かず、1823年の途中から1827年までをStephan Schützeが編者として務めた。

cember 1813)」

であり、約30年の時間的隔たりがあるテクスト2点である。

3.2. 近いことば性

この2つのテクストのどちらのほうが、読者に親密さを感じさせ、話しことば的であるのかについて分析してみたいと思う。

Ágel/Hennig（2006）は、ドイツ語テクストの近いことば性を測定するモデルを提唱した。Ágel/Hennig のモデルは Koch/Oesterreicher（1985）が提案した「近いことば（Sprache der Nähe）」と「遠いことば（Sprache der Distanz）」のモデルをさらに発展させたものである。モデルにおける「近さ」と「遠さ」という概念は総体的に、話し手と聞き手の間の心理的・コミュニケーション的な距離（親疎関係）を表している（渡辺 2009: 8、高田・椎名・小野寺 2011: 13-15 を参照）。Koch/Oesterreicher のモデルにおいてテクストの近さ・遠さを決定する際には、いくつかのパラメーターが基準となっている。例えば当該のテクストが会話であり、対面で話すコミュニケーションで、（話し手と聞き手が）親密な関係で、情緒的であって私的なものの方が、「近いことば性（Nähesprachlichkeit）」を高く保持していることになる（Koch/Oesterreicher 1985: 23 を参照）。反対にモノローグで、対面で話すコミュニケーションではなく、また、さほど親密な関係でなく、感情が表出されず、公的なものは遠いことば性が高いテクストであると言える。

Ágel/Hennig のモデルでは、上記のパラメーターを元に、当該のテクスト内に存在する近いことば性の高い要素を数え上げていき、最終的にその総数とテクストの総単語数、そして Ágel/Hennig が参照規準として提示している数値によって近いことば性を算出する（Ágel/Hennig 2006: 39 及び 68 を参照）。テクストの近いことば性を測定するにはミクロレベル（語・句レベル）とマクロレベル（文レベル）での数値算出が必要となる。Ágel/Hennig が設定した座標軸に、算出した値を最終的に位置づけることで、相対的に近いことば性の値を比較することが可能となる。

3.2.1. ミクロレベルでの分析

テクストA（1786年）とテクストB（1814年）をÁgel/Hennigの測定法に基づき、それぞれミクロレベルにおける近いことば性の数値を測定した。[7] 次に挙げる近いことば性が高い要素は、テクストBにおいてのみ使用されている。例えば呼称の1格（Anredenominativ）である。1814年のテクストBではのべ3例、呼称の1格が使用されていた。

1) Wer hätte wohl geglaubt, meine Freundin, daß so wichtige Begebenheit unsern unwichtigen Briefwechsel so lange hemmen würden!（1814: 55）
誰が次のことを考えたことでしょうか、親愛なる女性のみなさん。すなわち、こんなにも重要な出来事が、私たちの些細な往復書簡をこんなにも長く阻もうとは！

2) Doch, meine liebe Freundin, wir kennen beide unser Geschlecht hinlänglich [...]（1814: 55）
そうは言っても、親愛なる女性のみなさん、私たちはどちらも私たちの（女性という）性について十分に心得ています。

3) In Rücksicht der Ueberröcke, kann ich Ihnen, meine Liebe, nicht viel Neues melden [...]（1814: 57）
トップコートに関しては、私はみなさまに、親愛なるみなさん、新しい事を多くは伝える事はできません。

このようなmeine Freindin, meine liebe Freundin, meine Liebeのなどの呼びかけは、近いことば性が高い要素とカウントされる。また、心態詞（Abtönungspartikel）も近いことば性の高い要素として認められる。心態詞は、1814年のテクストBにおける1例だけ、すなわち上述の例文（1）におけるwohlがみられたのみである。

さらに、人称の直示表現（Personaldeixis）の総数にも違いがみられた。Ágel/Hennig（2006）では1人称代名詞と2人称代名詞が近いことば性が高い要素

7) 算出方法の詳細はÁgel/Hennig（2006: 35-61）を参照。

としてカウントされる。テクストAでは例えば以下のようなものが挙げられる。

4) […], wollen wir hier die ganze weibliche Tracht […] durchgehen. (1786: 17)
[…]我々はここにおいて、全ての女性服を[…]吟味したい。

5) Die Musterung der ganzen männlichen Tracht werden wir im Februar liefern. (1786: 21)
全ての男性服の吟味については、我々は二月におとどけする予定です。

1786年のテクストAでは、人称の直示表現は4例のみで、そのすべてがwirであった。それに対して、1814年のテクストBでは、wirをはじめ、ich、Sieなど、合計で18例が見られた。

6) Ich benutze daher sogleich die Zeit […] um Ihnen ein wenig zu erzählen, wie sich meine Mitbürgerinnen jetzt kleiden. (1814: 55)
そのため私はただちに時間を使って、[…]私と同じ都市にいる女性が現在どのような身なりをしているのかを皆さんに少し説明します。

以上のように、テクストB(1814年)では、呼びかけを用いることで読者に語りかけるような、まるで書き手がその場にいて対話をしているかのようなテクストの傾向性がうかがえる。また、「私」や「あなた」をテクスト内に使用することで、書き手の存在や、読み手自身の存在を常に意識させ、事物の説明テクストにアクセントを効かせている。

このようにカウントしていったミクロレベルでの調査結果は、以下の表に示す通りである。

表1　ミクロレベルでの「近いことば性」の値

	テキストA:1786年	テキストB:1814年
総単語数	938	950
ミクロレベルの値	9.52%	12.70%

ミクロレベルの値を比較すると、1814 年のテクストの方が、より近いことば性が高いことがわかった。

3.2.2. マクロレベルでの分析

Ágel/Hennig（2006）のモデルでは、マクロレベル、すなわち文レベルにおける近いことば性の値も測定される。マクロレベルでは、主語と動詞を一つずつ持ち合わせている「基礎文（Elementar-Satz）」が規準となる。基礎文のうち、主文であるものは「基礎文 1（Elementar-Satz 1）」、副文であるものは「基礎文 x（Elementar-Satz x）」と分類される。また、形式的には文ではないが文と等しい要素（例えば呼びかけや間投詞）、すなわち「文相当表現（Nicht-Satz）」もこのマクロレベルにおいて扱われる。ミクロレベルでも近いことば性の高い要素としてカウントされる meine Freundin といった呼びかけ表現は、マクロレベルで文相当表現「近いことば的な文相当表現（NNS: Nähe-Nicht-Satz）」[8] というカテゴリーとしてもカウントされる。[9] このような分類のもと、それぞれの要素がいくつあるのかを数え上げていく。以下にそれぞれの総数を表に示した。

表 2　マクロレベルでのそれぞれの値

	総単語数	NNS	全ての基礎文	基礎文 1（主文）	基礎文 x（副文）	DNS[10]	I-UBS[11]
テキスト A	938	4	86	68	18	13	6
テキスト B	950	4	98	55	43	-	4

Ágel/Hennig は、マクロレベルにおける近いことば性を数値として算出するには、比較の規準となるテクストを設けなければならないと考えた。そこで Ágel/Hennig

8) これ以降、話しことば的な文相当表現を NNS と表す。
9) マクロレベルに関する詳細な解説は、ミクロレベル同様、Ágel/Hennig（2006: 61-74）を参照。
10) DNS は「遠いことば的な文相当表現（Distanz-Nicht-Satz）」を意味し、見出し語や手紙の呼称形式などがこのカテゴリーに含まれる。例えば、1786 年のテクスト A には *1. Haarputz.*「1 .髪飾り」（1786: 17）といった見出し語が確認された。
11) I-UBS とは、「別の基礎文によって統合的に中断された基礎文」(Ágel/Hennig 2006: 64) と定義されている。すなわち、入れ子構造の基礎文のことを指す。

は、あるラジオの談話テクストを近いことば性が 100%であると便宜的に設定し（座標軸左端）、一方、カントの『プロレゴメナ』（1783 年）のテクストを近いことば性が 0%（遠いことば性が 100%）であると便宜的に設定し（座標軸右端）、それぞれを規準テクストとした。この座標軸間のどの辺りに、それぞれに分析したテクストが位置づけられるかを見ることで、テクスト同士の近いことば性の高低の比較が可能となる。[12)]

図 1　マクロレベルの座標軸

表 2 で示した測定結果を、Ágel/Hennig によって設定された両極の座標軸のなかに入れ込むと、以下のような結果が得られる。

表 3　マクロレベルでのそれぞれの近いことば性の値

分析対象	a) NNS／全基礎文	b) 基礎文 1／基礎文 x	c) 全基礎文／中断されている基礎文	d) 総単語数／NNS と DNS と全基礎文
テキスト A	0.83%	91.17%	5.88%	-8.74%
テキスト B	1.06%	15.93%	15.48%	-13.69%

a)ではテクスト内で全基礎文に対する NNS の割合を示している。この観点では 1814 年のテクスト B の方が少し近いことば性が高いことがわかる。b)の計算式では、主文と副文の割合を比較している。主文が多い程、近いことば性の高いテクストとなる。その結果、1786 年のテクスト A はこの点において、約 91%という高い近いことば性を持っていることがわかった。c)では、全基礎文にたいする入れ子構造の基礎文（I-UBS）の割合を示している。この入れ子構造の基礎文が少

12) 詳細な算出方法に関しては Ágel/Hennig（2006: 68-70）を参照。

ない程（これが少ないほどcの値は高くなる）、より近いことば性の高いテクストであることを示している。その結果、値がより高いテクストBのほうが近いことば性の高いテクストであることがわかった。最後にd)の計算式では、一つの基礎文がどれくらいの長さで構成されているかを測定する。基礎文が短い程、近いことば性が高いとされる。この結果、テクストAの方が、近いことば性が相対的に高いことがわかった。d)の計算式の結果では、マイナスの値が得られた。これは、d)の観点では、Ágel/Hennigが便宜上右端に設定した基準テクスト『プロレゴメナ』（近いことば性が0%であるという規準）より、今回のテクストAおよびテクストBのほうが右に来る、すなわち遠いことば性が高いことを示している。

Ágel/Hennigは、a)からd)で得られた4つの値の平均値をマクロレベルの近いことば性の値としている。そこで、それぞれのマクロレベルの値の平均値を以下の表に示す。

表4　マクロレベルでの4つの値の平均値

	テクストA: 1786年	テクストB: 1814年
マクロレベルの値	22.29%	4.70%

3.2.3. 最終的な近いことば性の値

Ágel/Hennigによれば、ミクロレベル、マクロレベルの両レベルで得られた値を平均化したものが最終的なテクストの近いことば性の高さである。その平均値は、以下の通りである。

表5　最終的な近いことば性の値

	テクストA: 1786年	テクストB: 1814年
ミクロレベルの値	9.52%	12.70%
マクロレベルの値	22.29%	4.70%
最終的な近いことば性の値	15.90%	8.7%

この結果から、今回の調査に限って言えば、1786年のテクストAのほうが1814年のテクストBに比べて近いことば性が高いことになる。

3.2.4. 語句レベルと文レベルのギャップ

近いことば性をめぐる以上の分析結果について、さらに考察を進めて行きたい。テクストAのほうが平均値として近いことば性が高くなった決定的な理由は、マクロレベル（文レベル）での近いことば性の値の大きさ、とりわけ b) 基礎文 1／基礎文 x にある。すなわち、テクストAでは、およそ 8：2 の割合で主文が従属文よりも圧倒的に多いのである(テクストBでは6:4の割合)。この点を除くと、テクストBのほうが近いことば性が高い。言い換えるならば、テクストBは、文構造という点では近いことば的ではないが、書き手は呼びかけや心態詞、そして ich と Sie という代名詞によって書き手と読み手を意識させる要素を散りばめることによって、読者により親近感を与え、「話しことば風」をかもし出しながら読みやすいテクストにしていると考えることができる。この意味で、テクストBは読み手（受け手）をより意識したテクストであると言えるかもしれない。

4. 描写の方向性から見た分析

4.1. 事柄に方向づいた描写

Ágel/Hennig（2006）に基づく近いことば性の分析は以上で終えることにして、この章ではテクストA（1786年）とテクストB（1814年）から女性の帽子に関する一節を抜き出して、その描写方法について比較を行ってみたい。なお、テクストAには挿絵が付いている。[13)]

まず、テクストAを具体的に見てみよう。

例文1：女性の帽子に関するテクストAの一節

2. Hüthe, trägt man jezt außerordentlich groß, und zu jedem Anzuge, nur nicht zur grande parure; häuffig Stroh-Hüthe mit hohem Kopfe, mit farbigem Bande eingefaßt; um den Kopf ein oder zwey dergleichen breite Bänder, oder eine dicke Binde von Farben-Flor, die mit einem Perlen-Knopfe gefaßt, und hinten in eine große Schleife gebunden wird, davon die Enden zwey bis drey Finger breit über

13) 本論文で分析対象とするテクストを選択する際には、帽子という同じアイテムに関して書かれたテクストであることを優先させたために、挿し絵の有無に関しては基準を揃えることができなかった。

den Rand des Huthes herabhängen. Auf der linken Seite eine Touffe von vier kurzen weißen Federn, aus welcher eine große farbige Schwung-Feder heraussteigt, die Follette oder La Dominante heißt, (Tab. I. No. 1.) Meist ist die Garnitur des Huthes von der Farbe des Kleides; außer wenn zwey Mode-Farben, wie in T. 1. No. 1. violet und dunkelgrün (gros verd) zusammentreffen.（1786: 17）

2. 帽子は目下、非常に大きなものが被られており、いずれの服装に対しても被られますが、正装に対してだけは被られません。しばしば頭部が高く、色のついたリボンで囲まれた麦わら帽子が被られています。頭部の周りは、一本か二本のそういった幅広なリボン、もしくは、色づいている花の、パールのボタンでとめられた太い帯によって結ばれていて、そして後ろで、リボンの形に結ばれています。そこからリボンの端が、2-3 本の指幅で、帽子の淵を越えて垂れ下がっています。左側には 4 本の短くて白い羽飾りからなる房があり、そこから Follette もしくは la Dominante と呼ばれる大きくて色のついた弓形の曲線の羽飾りが外側に出ています（挿し絵 1-1）。たいてい、帽子の飾りというのは、洋服の色からなっています；ただし、挿し絵 1-1 にあるバイオレット色と深緑色の二色の流行色がぶつかり合っている場合以外を除いてではありますが。

このテクスト A の一節では、淡々と帽子の形状を書き連ねている様子が見て取れる。このように、テクスト A は洋服や装飾品を即物的に説明していることが特徴的である。当時流行していた帽子の大きさをはじめ、リボンの幅、装飾に使用されている形状、素材、長さ、太さ、色、そしてどの位置にどのような形で施されるのかなど、詳細に描写されている。ほとんどの場合に文の中心（主語）に置かれるのは、帽子または帽子の装飾である。つまり 1786 年のテクスト A は、事柄（事物）に方向づけられたテクストの書き方であると言える。

4.2.　読者に方向づいた描写

では次に、テクスト B における女性の帽子に関する一節を挙げる。

例文２：女性の帽子に関するテクストＢの一節

So gab es z. B. vergangenes Frühjahr Hüte à la Czernitchef, à la Wittgenstein, und mehrere dergleichen Moden, die mir jetzt entfallen sind. – Gegenwärtig beschäftigt sich das schöne Geschlecht vorzugsweise mit der Nation, der sie vor einigen Monaten die Befreiung von einem schweren und drohenden Unglück verdankte, und gewiß ist es, um das Andenken der Lage von Großbeeren und Dennewitz zu erhalten, daß die neueste Mode in schwedischen Hüten bestehet. Ein solcher Hut hat einen sehr hohen Kopf und einen kleinen Schirm, der von einer oder von beiden Seiten (aber nicht vorn) aufgeschlagen wird. Ist er nur von einer Seite aufgeschlagen, so muß ein Federbusch gleichsam zur Agraffe dienen, und an derselben Seite sich befinden. An denen Hüten aber, die von beiden Seiten in die Höhe gehen, werden die Federn vorn in der Mitte ziemlich hoch am Kopfe festgesteckt. Gewöhnlich sind diese Hüte von schwarzem Sammt und mit weißen oder schwarzen Strausfedern garnirt. Zuweilen bilden die Damen auch die Federbüsche von diesen beiden Farben. Einige Damen machen diese Hüte auch von weißem Atlas und dann sind die Federn violet und neugrün.（1814: 56）

例えば去年の春、Czernitchef 風や Wittgenstein 風の帽子がありました。また、今となっては私の記憶からは無くなってしまった、いくつかの同様のモードもありました。重くさし迫っていた不幸から数ヶ月前に解放してもらえた女性は、現在、〔その解放者の恩人であるスウェーデン〕国民にとくに関心を持っています。そして最新の流行が、Großbeeren そして Dennewitz での戦いの状況を思い出す目的で、スウェーデンの帽子にあることは間違いありません。[14] そのような帽子は頭部がとても高く、どちらか一方、もしくは両側から（けれど前からではなく）折り返されているような小さなひさしがついています。ひさしが一方からしか折り返されていない場合は、羽飾りがいわば留め金として用いられていて、同じ側にあります。ですが両側が折り上がっ

14) ナポレオンの支配下にあった当時のドイツでは、解放戦争（Befreiungskriege: 1813-1814）が行われていた。1813 年 8 月 23 日には Großbeeren 近郊にて、9 月 6 日には Dennewitz にて戦闘が勃発した。

ているような帽子には、羽が前方中央に、頭部の比較的高い位置にしっかりとつけられています。普通このような帽子は黒いビロードでできていて、白色もしくは黒色のダチョウの羽で飾られています。ときおりこの両色からなるダチョウの羽を用いる女性もいます。このような帽子を白いサテンで作る女性もいて、その際には羽はバイオレットと新緑色です。

テクストBの最初の文は、書き手によって流行に関する回想が述べられている。その後で、政治的な状況と合わせて、現在の流行の帽子が示されている。1814年のテクストは帽子の高さに関しては書かれているが、1786年のテクストと比べると、それほど細部に至るまでの描写はなされていない。さらに、テクストの後半では、女性（Damen）が主語として登場し、実際に帽子を身につけている人物に焦点が移行している。1814年のテクストは、大枠として読者に方向づいた書き方がなされていると言えるであろう。

今回の2つのサンプルテクストに限ってのことではあるが、描写の特徴として1786年のテクストAは事柄に方向づけられた書き方の傾向性、一方1814年のテクストBは読者に方向づけられた書き方の傾向性が確認できたと言えるだろう。

5.　まとめ

本論文では、『豪奢とモードの雑誌』から女性の服装に関して記述された1786年のテクストと約30年後の1814年のテクストをサンプルとして取り上げた。1786年のテクストAは文構造では主文を多用することで、相対的により高い近いことば性を保持しながらも、描写法の特徴としては、テクスト内で扱う洋服や装飾品の形状や様態など事柄に方向づいていることが挙げられる。一方で1814年のテクストBは、文構造という観点では近いことば性が低いが、語句レベルでは呼びかけや心態詞などを多く使用し、読者に語りかけるような効果を持ちあわせている。すなわち1814年のテクストBは単に事物を描写するだけでなく、読者の存在を意識して、共感を得やすいよう読者に方向づいたテクストであると言える。

今回は1786年と1814年の2つのサンプルテクストのみを比較してえられた結果であるため、今回の結果から当時のテクストの一般的な傾向に言及することは到底できない。この2つのテクストに限って見て取れた、事柄に方向づいた書き

方から読者に方向づいた書き方へという大きな傾向性が、今回の分析対象にのみに観察できるものであるのか、それともドイツのモード誌のその後の文体的特徴のひとつをなすものであるかについて判断するためにも、さらに多くのテクストの分析を行うことが、筆者にとって今後の課題である。

原典資料

テクスト(A) Journal der Moden (1786): Weibliche Kleidung.
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085474

テクスト(B) Journal für Literatur, Kunst, Luxus und Mode (1814): Moden. Modenbericht aus Berlin, im December 1813.
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085685

参考文献

Adelung, Johann Christoph (1793/ 1796/ 1798 / 1801): *Grammatisch-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart.* 4 Bde. Leipzig. Nachdruck: Hildesheim/New York 1970.

Ágel, Vilmos/Hennig, Mathilde (Hg.) (2006): *Grammatik aus Nähe und Distanz: Theorie und Praxis am Beispiel von Näheteten 1650-2000.* Tübingen.

赤木登代（2008）研究ノート「ドイツ女性誌の系譜―啓蒙と娯楽の機能をめぐって―」［大阪教育大学、『大阪教育大学紀要. I, 人文科学』 第 56 巻第 2 号 S.1-18］.

Campe, Joachim Heinrich (1807/ 1808/ 1809/ 1810/ 1811/ 1813): *Wörterbuch der Deutschen Sprache.* 6 Bde. Braunschweig. Nachdruck: Hildesheim/New York 1969.

Demske-Neumann, Ulrike (1996): Bestandsaufnahme zum Untersuchungsbereich Syntax. In: Fritz, Gerd/Strassner, Erich (Hg.) (1996): *Die Sprache der ersten deutschen Wochenzeitungen im 17. Jahrhundert.* Tübingen, S.70-125.

Koch Peter/Oesterreicher, Wulf (1985): Sprache der Nähe — Sprache der Distanz. Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Spannungsfeld von Sprachtheorie und Sprachgeschichte. In: *Romanistisches Jahrbuch* 36, S.15-43.

Kröll, Christina (1979): *Journal des Luxus und der Moden. Kolorierte Kupfer aus*

Deutschlands erster Modezeitschrift. Dortmund.

Kuhles, Dories (2000): Das „Journal des Luxus und der Moden" (1786-1827). Zur Entstehung seines inhaltlichen Profils und seiner journalistischen Struktur. In: Kaiser, Gerhard/Seifer, Siegfreid (Hg.) (2000): *Friedrich Justin Bertuch (1747-1822). Vergleicher, Schriftsteller und Unternehmer im klassischen*. Weimar, S.489-500.

新田春夫（2010）「ドイツ宗教改革期における民衆教化文書—その言語的・文書的特徴—」［日本独文学会『ドイツ文学』第 140 号 S.76-91］.

Polenz, Peter von (1994): *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart. Band 2. 17. und 18. Jahrhundert*. Berlin.

Schilling, Michael (1990): *Bildpublizistik der frühen Neuzeit; Aufgaben und Leistungen des illustrierten Flugblatts in Deutschland bis um 1700*. Tübingen.

芹澤円（2011）「宗教改革期の印刷ビラにみる説得的効果　ー民衆の心をつかむレトリック」［学習院大学文学会『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第 15 号 S.1-30］.

芹澤円（2012）「16 世紀の印刷ビラ・小冊子の話しことば性　ーテクストの種類と意図との関連において」［学習院大学文学会『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第 16 号 S.105-130］.

芹澤円（印刷中）「ドイツ最古の週刊新聞（1609 年）の書きことば性をめぐって—出来事をどのように報道するか—」［金水敏・高田博行・椎名美智（編）『歴史語用論論集』ひつじ書房］.

Steiner, Walter/Kühn-Stillmark, Uta (2001): *Friedrich Justin Bertuch. Ein Leben im klassischen Weimar zwischen Kultur und Kommerz*. Köln.

Straßner, Erich (1997): *Zeitung*. Tübingen.

高田博行、椎名美智、小野寺典子（編）（2011）『歴史語用論入門　ー過去のコミュニケーションを復元する』大修館書店.

渡辺学（2009）「話しことばの特性をどのように測定したらよいのか？」、高田博行（編）『話しことば研究をめぐる 4 つの問い』［日本独文学会『日本独文学会研究叢書』第 065 号 S.1-21］.

（せりざわ・まどか　　学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程）

Textmerkmale in deutschen Modezeitschriften

Am Beispiel der Beschreibung von Kleidungsartikeln in der Zeit 1786 und 1814

MADOKA SERIZAWA

In dieser Arbeit spielt die von 1786 bis 1827 veröffentlichte Modezeitschrift „Journal des Luxus und der Moden" die zentrale Rolle. Diese Zeitschrift wird vorgestellt, und es werden einige besondere Textmerkmale bei der Beschreibung von Kleidungsartikeln untersucht.

Das Wort „Mode" wurde von dem französischen Ausdruck „à la mode" abgeleitet. Bei Adelung (1798) z. B. bedeutet ‚Mode' „die eingeführte Art des Verhaltens im gesellschaftlichen Leben, die Sitte, Gewohnheit, und in engerm Verstande die veränderliche Art der Kleidung und der Anordnung alles dessen, was zum Schmucke gehöret, wofür man ehedem auch das Wort Weise gebrauchte". In diesem Sinne wurde die damalige Mode eng mit dem verbunden, was gesellschaftlich erlaubt war. Die von mir untersuchte Modezeitschrift, deren Begründer Friedrich Justin Bertuch (1747-1822) und Georg Melchior Kraus (1737-1806) waren, hat insgesamt fünfmal den Titel verändert und behandelte ganz unterschiedliche Themen wie männliche und weibliche Kleidung, Möbel, Musik, Tanz und Gesundheit. Schätzungen gehen davon aus, dass die Zeitschrift mindestens 25.000 Leser hatte (vgl. Kuhles 2000); sie kann deshalb in der damaligen Zeit als ein Bestseller angesehen werden.

Es ist zu vermuten, dass die Modezeitschrift in den 42 Jahren ihres Bestehens die Art und Weise ihres schriftlichen Ausdrucks verändert hat. Daher möchte ich in dieser Arbeit zwei Texte aus unterschiedlichen Zeiten (nämlich vom Januar 1786 und vom Januar 1814), die beide weibliche Kleidung thematisieren, miteinander vergleichen und dabei untersuchen, ob es Unterschiede zwischen diesen beiden Texten gibt. Dabei analysiere ich diese Texte unter zwei Aspekten, nämlich unter dem Aspekt von Nähesprachlichkeit und unter dem Aspekt von der Art der Darstellung.

Auf der Mikroebene (d.h. der Wort- oder Phraseebene) der Nähesprachlichkeit kann man zunächst mehr nähesprachliche Elemente in dem Text von 1814 als in demjenigen von 1786 beobachten. Beispielsweise sind nur in dem Text von 1814 Anredenominative, wie z. B. *meine Freundin*, zu finden. Solche den Leser bzw. die Leserin direkt ansprechenden Ausdrücke werden als nähesprachliche bzw. mündliche/gesprochene Ausdrücke angesehen. Auf der Makroebene (Satzebene) hingegen zeigt meine Analyse, dass der Text von 1786 mehr Nähesprachlichkeit hatte. Der Grund dafür wird in der Zahl der Hauptsätze gesehen. Der Text von 1786 verwendet sehr viel mehr Haupt- als Nebensätze.

Unter den Aspekten der Darstellung vergleiche ich weiter zwei Texte, die weibliche Hüte zum Thema haben. In dem Text von 1786 werden viele auffällige Dinge beschrieben: Wie hoch der Hut ist, wie lang, wie groß, welche Farbe er hat, aus welchem Stoff er besteht usw. Manchmal ist das Subjekt ein Hut oder ein den Hut schmückendes Detail. Der Text von 1814 hat zunächst die damalige politische Situation erklärt und dann erläutert, welcher Hut in Mode war. Man kann hier also keine mehr so detaillierte Beschreibung finden wie in dem Text von 1786. Und am Ende dieses Textes ist das Subjekt (der Aspekt) sogar vom Hut zu den Damen übergegangen.

Auf dieser Analyse basierend, kann ich eine grobe Tendenz beobachten, dass der Text von 1786 sachorientiert und derjenige von 1814 leserorientiert ist. Aber diese Aussage basiert auf nur zwei Stichprobetexten. Deshalb sind weitere Untersuchungen notwendig, die auch den historischen Kontext zu berücksichtigen hätten.